

令和 8 年度

へき地・小規模校教育研究発表会

第 29 回 研究発表会資料

研 究 主 題

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子供の育成」
～児童・生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実を目指して～



青ヶ島村（高台から望む集落全景）



新島村（本村前浜海岸）

日時：令和 8 年 8 月 3 日（月） 午後 1 時 30 分から午後 4 時 30 分まで
（受付開始 午後 1 時）

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（カルチャー棟 小ホール）

目 次

I 研究発表資料

青ヶ島村立青ヶ島小学校	1
新島村立新島中学校	11

II へき地・小規模校の教育について

青梅市教育委員会	21
檜原村教育委員会	22
奥多摩町教育委員会	23
大島出張所・大島町教育委員会・利島村教育委員会・新島村教育委員会・神津島村教育委員会	24
三宅出張所・三宅村教育委員会・御蔵島村教育委員会	25
八丈出張所・八丈町教育委員会・青ヶ島村教育委員会	26
小笠原出張所・小笠原村教育委員会	27

I 研究発表資料

自立した学習者の育成

～「デジタルを活用したこれからの学び」を通して～

青ヶ島村立青ヶ島小学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

青ヶ島は、東京都心から南方約 360km、八丈島の南約 70km に位置する、面積 5.96 km²の楕円形の火山島である。人口は令和 8 年 5 月 1 日現在で 157 人、世帯数は 113 世帯であり、日本で最も人口の少ない自治体である。地形の最大の特徴は、大きな火口カルデラ（外輪山）の中に「丸山」と呼ばれる内輪山をもつ二重式火山構造にあり、その景観は「世界の絶景」にも選出され、国内外から観光客が訪れている。また、島内には「ひんぎゃ」と呼ばれる地熱地帯があり、その地熱は村営サウナや特産品の塩作りに活用されている。住民が生活する集落はいずれも標高 250m 以上の高台に位置しているため、近隣の島よりも冷涼に感じられることや、年間平均湿度が 85%と極めて高く、一年を通じて霧が発生しやすいことが気候上の特徴である。

2 学校の概要

青ヶ島小学校は明治 7 年 1 月 15 日に開校し、令和 6 年に開校 150 周年を迎えた歴史ある学校である。青ヶ島中学校は昭和 22 年に創立され、小学校に併設された。学校教育目標には「自立」を掲げ、青ヶ島の歴史・文化と自然を愛し、変化の激しい時代を自立して生きていく力と、地域社会の豊かな発展に貢献する力を育むことを基本方針としている。

本校では、令和 7 年度より文部科学省から「授業時数特例校」（主要教科の時数を 1 割削減し、生み出した時間を「生活科」や「総合的な学習の時間」「特別活動」に充当）の指定を受け、また「デジタルを活用したこれからの学び」推進地区・実践校として、特色ある教育課程を編成・推進している。各教科等の授業においては、二重式火山等の特徴的な地域資源の活用や、地域芸能保存会の協力を得た島唄・島踊り等の伝統文化学習、学校農園を活用した「かんも（さつまいも）」や米の栽培など、地域と一体となった教育活動を実践している。また小中併設校の利点を生かし、連携した指導体制や 9 年間を見通した生活指導、異年齢集団での合意形成を図る話し合い活動を継続的に実施している。

令和 8 年 6 月 1 日の児童数は 5 名、生徒は 1 名の計 6 名である（令和 7 年度は児童 5 名、生徒 4 名）。教員は、校長、小中両副校長を含め小学校 8 名、中学校 12 名が在籍している。

II 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

本校の研究は、青ヶ島村が掲げる「青ヶ島村教育ビジョン（第 2 次）」の「主体的・対話的で深い学び」と、本校の教育目標である「自立」の実現を核としている。先行きが予測困難な現代社会においては、自ら課題を設定し、デジタルツールを効果的に活用しながら学習を

調整し、課題解決に向けて主体的に行動できる力を育むことが重要である。

本校の児童・生徒は、課題意識をもって学習に取り組むことや、自身の習熟度に合わせて学習方法を選択することができる。一方で、児童及び生徒数を合わせて10名以下という環境ゆえに、「仲間や周囲の人々と協働して課題を解決する力」には課題が見られる。また、児童・生徒の人数に対して教員数が多い学習環境は、学習者が受け身になりやすく、教員側も教え込み主体の指導形態に陥りやすい側面も併せもっている。

このような実態を踏まえ、本校ではこれまでの指導法を見直し、デジタルツールを活用しながら各学年1名程度であっても児童・生徒が主体的に学びを深められる「学習者主体の新たな学びのスタイル」を提案することとした。これにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていく。

以上から、本研究では、主体的に学習に取り組む児童・生徒を「自立した学習者」と定義し、その育成を研究主題に掲げ、副題を「デジタルを活用したこれからの学び」と設定し、全校体制で研究を推進する。

2 研究のねらい（研究仮説）

「学習者主体の新たな学びのスタイル」が実現すれば、児童・生徒は自ら課題を設定し、学習方法を選択・調整しながら主体的に学び続ける「自立した学習者」へと成長するであろう。

Ⅲ 研究の内容

1 研究の内容

本研究では、「学習者主体の新たな学びのスタイル」の実現に向けて授業デザインを設定し、それぞれの授業実践を通してその有効性を検証することで、研究主題の実現を目指す。

<授業デザイン>

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 子供が自ら学習を構築する「個別最適な学び」の実現（個別最適）(2) 主体的に取り組みたくなる課題設定と問題解決的な学習の推進（問題解決）(3) 協働的な活動とデジタル活用による思考の交流と深化（協働）(4) 学びのプロセス全体を通じた自己調整能力の育成（自己調整）(5) 思考スキルと思考ツールの活用による論理的・批判的思考力の育成（思考）(6) デジタルを活用した新しい授業デザインと教材開発の推進（教材） |
|---|

なお、先に挙げた青ヶ島の豊かな自然環境や地域資源及び授業時数特例校、小中連携した指導体制といった本校の特性を最大限に生かし、全校体制で研究主題の具現化に取り組む。

2 研究の方法

本研究の主題である「自立した学習者の育成」を達成するため、「校内研究日」「授業力向上研修」「島しょ研修」の研究、研修及び「教育先進校への視察」の枠組みで研究を推進する。

(1) 研究推進の取組

ア 校内研究日（全7回）

研究授業の検討をする場及び研究方針の共通認識を図る場とする。指導主事による訪

間指導の他、研究の展望や課題、解決策を共有する。

イ 授業力向上研修（全7回）

個々の教員の指導技術及び教員の学習者を見取る力、授業観察力を高める場とする。
各教員が順次研究授業を行い、協議会を通して授業改善を図る。

ウ 島しょ研修（全2回）

島しょ地域研修支援事業を活用し、本校の教育課題に特化した専門的な研修を行う。
小中それぞれの実態に応じた研究授業と協議会を実施する。

エ 教育先進校への視察（2回）

「デジタルを活用したこれからの学び」推進事業の予算を活用し、本校の研究主題と関連性の高い教育先進校2校への視察を実施した。

【視察先及び時期】

・江戸川区立二之江中学校（令和7年9月）・台東区立金曾木小学校（令和8年1月）

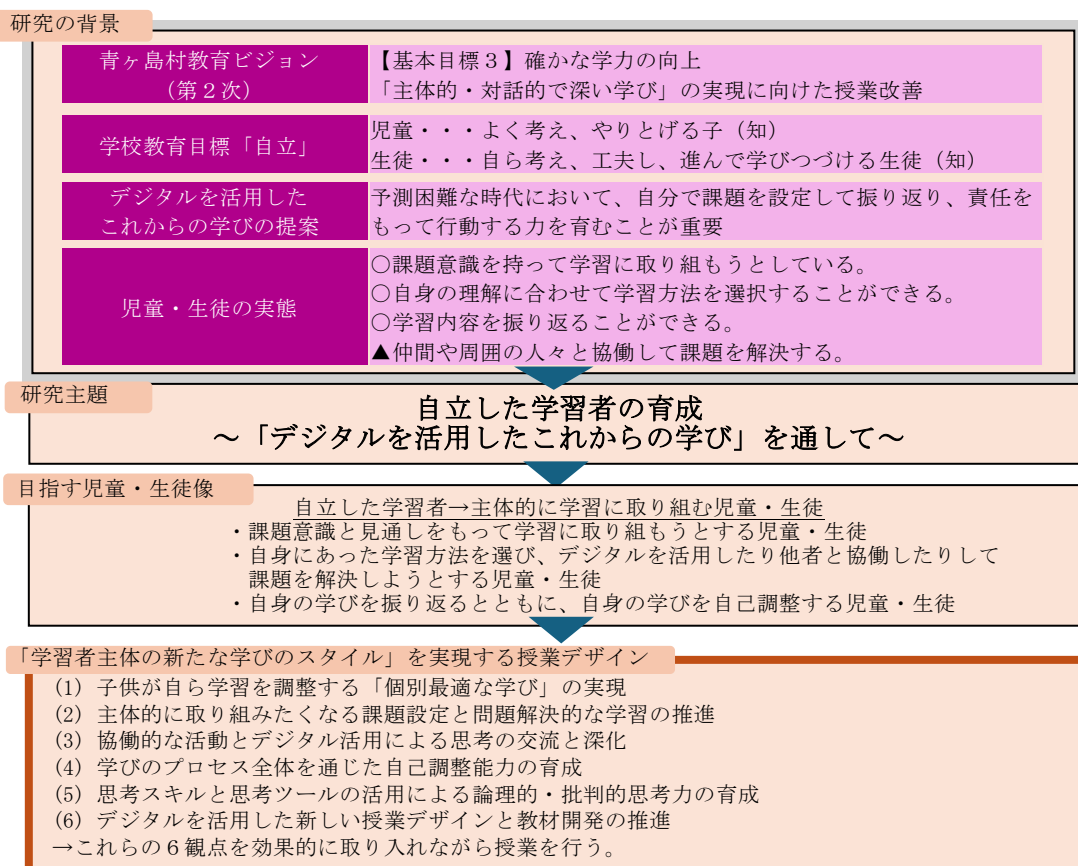
(2) 小中連携した研究体制

本校の全校児童・生徒6名、小中教員20名という環境を鑑み、あえて分科会を設けず、全教員が一つのチームとして研究に取り組んでいる。小学校・中学校それぞれの教員が研究推進委員を務め、校種の枠を超えて相互に研究授業を観察し合う小中連携の体制を整えている。



（オンラインでの校内研究）

3 研究の構想図



4 実践報告

(1) 実践事例 1

授業デザイン：子供が自ら学習を調整する「個別最適な学び」の実現

ア 単元名

中学校第2学年 数学科「式の計算」

イ 課題

「身の回りの問題について文字を使って説明しよう」

ウ 学習活動

「式の計算（未知数を文字に置き換える）」の学習において、課題と課題解決につながる資料を複数提示し、既習事項を活用して身近な事象を数学的に説明する活動を展開した。これにより、生徒は自身の興味・関心や理解度に応じて資料を選択しながら学習を進める。

エ 授業の工夫

(ア) 教材作成ソフトを活用した複数の課題を提示

複数の課題を提示し、生徒が授業内に取り組む課題を自ら決定する場面を設定することで、自己決定に基づいた主体的な学びを保証した。

(イ) 教員による説明の精選

教員による説明の時間を最小限にし、生徒自らが自己決定に基づいて試行錯誤しながら学習を進め、自らの理解状況に応じて学びを調整できるようにした。教員は「教え込み」から、必要に応じて支援する「伴走」へと役割を転換した。

(ウ) 説明する活動の設定

説明する活動を通して、自身の理解度を客観的に把握させるとともに、必要に応じて苦手な箇所の復習に時間を充てる等、自ら学習状況に合わせて学びを調整できるようにした。

オ 成果

(ア) 生徒の変容

○課題に取り組む中で、単元の既習事項を自発的に振り返り、自身の理解不足を補うために必要な内容を再確認するなど、学びを自ら調整する姿が見られた。

○課題解決型学習において、生徒は既習事項を多角的に駆使していた。

○50分の授業時間のうち45分間、生徒は教員の指示を待つことなく、自立して学習に取り組むことができた。

(イ) 教員の変容

○指導の言葉を意識的に減らすことで、生徒の思考の過程をじっくりと観察することが可能となり、適切なタイミングでの声掛けにつなげることができた。



（「教え込み」から「伴走」へ）

(2) 実践事例 2

授業デザイン：主体的に取り組みたくなる課題設定と問題解決的な学習の推進

ア 単元名

第5学年算数「偶数と奇数、倍数と約数」

イ 課題

「最も少ない枚数で済ませるには？」

ウ 学習活動

本時までの既習事項は奇数と偶数、倍数と公倍数、約数である。これらの考え方を基に問題を解決するために試行錯誤する中で公約数についての知識を獲得していく。児童には課題解決の手立てとして、シートが敷き詰められている写真、縦30マス横12マスの図、教科書等の資料を示した。これらの資料と児童の対話を通して課題を解決する。

エ 授業の工夫

(ア) 実生活と結びついた課題の設定

児童が主体的に取り組みたくなるよう、実生活と結びついた課題を設定し、児童が必要を感じて課題解決に取り組めるようにした。

(イ) 課題解決を支える資料の提示

自力解決の際にヒントとなる資料と算数の用語の説明が書かれている算数のページ、定着を図るための習熟プリントを用意した。図や具体物を手掛かりに考えることで、用語とその意味を関連付けて捉え、算数的な概念の理解につなげた。

(ウ) 一人1台端末を活用した問題解決

一人1台端末を活用して情報収集・分析を取り入れ、自力解決と収集した情報を比較・検討する学びを往還させることで、児童が自ら考えを深め、納得して学習内容を理解できるようにした。

オ 成果

(ア) 児童の変容

公約数という用語がわからない状態からスタートしても、図を用いたり、一人1台端末を活用した協働的な学びを取り入れたりして課題に取り組むことで、最終的に「約数・公約数の意味が理解できた。」という納得感を伴う定着につながった。

(イ) 教員の変容

児童の知的好奇心を刺激する課題設定から始まり、適切な資料と一人1台端末を活用した支援によって、児童相互の対話と自力解決を導き、最終的に算数的な概念の理解へと繋げる問題解決的な学習の手法を身に付けた。



(課題を解く児童)

(3) 実践事例 3

授業デザイン：協働的な活動とデジタル活用による思考の交流と深化

ア 单元名

第4学年理科「夏の星座」 第3学年国語「本は友だち」

イ 課題

理科「星座のことを調べて伝え合おう」 国語「興味をもったことを紹介しよう」

ウ 学習活動

4年生児童が理科の学習で星座について学んでいることを知った3年生児童が星座や神話について強く興味を示した。そこで、3年生と4年生が星座について学ぶ合同授業を行った。授業の前半では、児童が個別に図書資料やインターネットの動画をもとに星座のエピソードを調べ、後半では調べた内容を発表した。

エ 授業の工夫

(ア) 学年・教科の枠を超えた学習活動の設定

4年生の理科「夏の星座」と3年生の国語「本は友だち」を関連付けた合同授業を設定した。各学年1名であっても、学年、教科の枠を超えたカリキュラム・マネジメントをすることで、児童が協働する場面を設定した。

(イ) 図書資料とデジタル資料の活用

4年生は、「夏の星座」について調べる際に図書資料のみでなく、インターネットの映像資料を活用させる。デジタル資料を活用することで星座の位置関係や、文字だけでは想像しにくいギリシャ神話の物語を視覚的に捉えられるようにし、理解を促した。

オ 成果

(ア) 児童の変容

発表の際に、自由に意見や考えをやり取りすることで、熱気がある生き生きとした学びの姿が見られた。授業の終わりには、児童が学習に使用した図書資料を借りたいと申し出るなど、児童の意欲が高まった様子がうかがえた。

(イ) 教員の変容

4年生の「星座に関する知識を広げること」と、3年生「自分の読書の幅を広げていくこと」といった学年や教科を超えた学習活動であっても、それぞれの単元の目標を達成させ、更に多角的な視点からの交流を引き出すことができた。

「3年生には星座は難しい」という固定観念にとらわれず、ICT（動画）により関心を高め、4年生との協働という手だてを組み合わせることで、3年生の学びの可能性を広げることができた。



(異学年の協働的な学び)

(4) 実践事例 4

授業デザイン：学びのプロセス全体を通じた自己調整能力の育成

ア 単元名

中学校第2学年 総合的な学習の時間「青ヶ島めぐり」

イ 課題

「青ヶ島を世界に紹介しよう」

ウ 学習活動

自身の住む青ヶ島の魅力を、実際にその場所に赴き、英語を用いて発信する活動を行った。見学コースの選定、発表内容の構成、及び授業内での進捗管理を生徒に委ねることで、単元の見通しをもちながら自ら学習を調整して進める学びを促した。本活動は英語科と連携した教科横断的な取組として実施した。

エ 授業の工夫

(ア) 学習の見通しをもたせる活動の設定

最終的な発信日（青ヶ島めぐり当日）までの全体スケジュールを生徒と共有し、逆算して本時の目標を立てさせた。単元全体を見通しながら学習を進めることで、自ら計画を立てて学習を調整できるようにした。

(イ) 振り返りとデジタルツールを活用した自己調整

毎時間の進捗状況を生徒自身が振り返り、「英語スピーチの練習に重点を置く。」「コース設定や紹介内容を再考する。」など、その時の自分に必要な活動を自ら決定できる場面を設定した。

また、英語のガイド原稿作成では、オンラインの音読例（アクセント、イントネーション等）やタブレットの録音機能を活用し、自身の発音を客観的に振り返り、改善できるようにした。

オ 成果

(ア) 生徒の変容

一度作成した原稿に対し、「この表現の方が伝わりやすいのではないか。」「より英語らしい表現にしたい。」と、生徒自らがより高い目標を再設定し、推敲を重ねる等、学習を自己調整する姿が見られた。

また、見学コースや島の歴史を深く調査する過程で、本校の経営方針にもある、自らの故郷を再発見し、主体的に語ろうとする力の具現化が見られた。本単元の成果を、次ステップである海外移動教室での紹介活動へと繋げることで、年間を通じた見通しのある探究活動を展開することができた。

(イ) 教員の変容

教員が指示を出すのではなく、生徒に判断を委ねる時間を多く確保したことで、生徒の主体的な活動を引き出すことができた。また、教科横断的な視点での教材研究が深まった。



（英語での青ヶ島の紹介）

(5) 実践事例 5

授業デザイン：思考スキルと思考ツールの活用による論理的・批判的思考力の育成

ア 単元名

第3学年、第5学年、第6学年 総合的な学習の時間 「青ヶ島の魅力を発信しよう」

イ 課題

「青ヶ島の良さ・魅力とは何か」

ウ 学習活動

児童が抱く青ヶ島の魅力に対する考えをさらに深めるため、地域住民が感じる魅力を、インタビューやアンケートを通して調査し、比較・分析する活動を行った。得られた情報を整理し、多角的な視点から島の魅力を再発見し、村の内外へ発信することを目指す。

エ 授業の工夫

(ア) 思考ツールと ICT を活用した情報の整理・分析

教室内にはベン図をはじめとする複数の思考ツールを掲示し、児童が自身の思考プロセスに合わせて最適なツールを選択できるよう環境を整えた。付箋に書き出した考えをベン図で整理したり、オンラインのテキストマイニングの手法を用いたりすることで、思考の可視化と深化を図った。

(イ) 児童の試行錯誤を支える伴走的な支援

自立した学習者を育成するため、教員は学習中の発話を最小限に留め、児童自身の試行錯誤を促す「伴走者」に徹した。児童の思考の過程を見取りながら必要に応じて支援することで、論理的・批判的に考える力を育成できるようにした。

オ 成果

(ア) 児童の変容

漠然としていた「島の魅力」をベン図やICTを活用した情報の分析によって、単なる情報の羅列に留まらず、情報同士の比較や関連付けがしやすくなり、その特徴や背景、価値について考察する姿が見られた。

また、自分たちの主観的な考えと、調査で得た村民の意見を比較し、「なぜ相違があるのか。」「どちらの視点で発信すべきか。」といった批判的思考が児童の間から自然発生した。当初は受け身であった児童が、後半には「年齢層ごとの傾向を棒グラフで比較したい。」とアイデアを自ら提案し、学習を調整する姿が見られた。

(イ) 教員の変容

地域住民や他学年を巻き込んだ「村民も含めた協働的な学びの場面」を組織的に作り出せるようになった。

また、伴走的な支援を意識し、指導の言葉を意識的に減らすことで、児童の様子をじっくりと観察することができ、適切なタイミングで最小限の助言を行うことができた。



(思考ツールで協働的に学ぶ児童)

(6) 実践事例 6

授業デザイン：デジタルを活用した新しい授業デザインと教材開発の推進

ア 題材名

中学校第1学年 技術・家庭科 家庭分野「食事の役割と栄養素」

イ 課題

「中学生が1日に必要なエネルギーや栄養素の摂取量を理解し、自身の食生活をより良く工夫しよう」

ウ 学習活動

生徒が自らの食生活を客観的に振り返り、改善策を立案する活動を展開した。栄養バランスを自動計算できるWebサイトを用いて摂取量を可視化し、その分析結果と改善案をスライドに集約した。活動中は教科書や各種Webサイト等の多様な資料から必要な情報を生徒が自ら選択して活用し、試行錯誤を繰り返しながら最適な献立や食習慣の検討を行った。

エ 授業の工夫

(ア) デジタルツールを活用した思考の可視化

スライドや栄養計算サイトといったデジタルツールを、単なる効率化の道具ではなく、自身の状況を客観視し、思考を整理するための「思考のプラットフォーム」として位置付けた。デジタルツールを情報を整理・分析するための手段として活用することで、自ら課題を見だし、改善策を考えられるようにした。

(イ) 学習方法の自己選択を促す授業づくり

資料の選択やスライド作成の手順を一律に指示するのではなく、生徒自身が選択できるようにした。生徒が自らの判断で最適な資料を選び、納得のいくまで試行錯誤できる環境を整えることで、自ら判断して学習を進める態度を育成した。

オ 成果

(ア) 生徒の変容

作成したスライドを相互に閲覧し、オンライン上で意見を交換することで、自分とは異なる改善の視点を取り入れる協働的な姿が見られた。

また、他者の意見やWebサイトの分析データを基に自身の学習を振り返り、「次時はどの項目を重点的に修正すべきか。」を判断し、次時の活動を自ら調整することができた。



(デジタルツールの活用)

さらに、学習ツールの選択が生徒に委ねられたことで、個々の関心や理解度に応じた深掘りが可能となり、意欲的に課題解決に没頭する姿が確認された。

(イ) 教員の変容

外部サイトや校内ツールを効果的に組み合わせることで、生徒が主体的に学習を進められる学習環境を構築できるようになった。

また、生徒がデジタルツールで試行錯誤する様子を見守ることで、個々の思考プロセスに応じた適切なタイミングでの介入が可能となった。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 児童・生徒の変容

安易に教員に答えを求めるのではなく、「自分でやってみようとする姿勢」や、自ら問いを発する姿が見られ 子供が自ら学びをコントロールし始めるようになった。

一例を挙げると、理科の実験で「他にはどんな方法があるかな。」という教員の問いかけに対し、児童が装置を工夫し試行錯誤する姿が見られるなど、自立的な学びを引き出せた。

(2) 教員の変容

「学習者主体の授業づくりの取組」に関するアンケートの結果は、以下のとおりである。

質問項目	回答項目	回答数	
児童・生徒が主体的に取り組める課題や課題解決のための資料を用意するような授業に取り組んでいますか。	取り組んでいる。	17 名	100%
	取り組んでいない。	0 名	0 %
教えすぎない、見守る姿勢（支援の引き算）を意識し、自己解決の時間を確保できましたか。	できた。	12 名	70.6%
	意識しているが、まだ難しい。	3 名	17.6%
	できていない（「葛藤がある」を含む）。	2 名	11.8%

全ての教員が、学習者主体の授業に取り組んでいることが分かった。また、約 7 割の教員が教えすぎない、見守る姿勢ができ、その手応えを感じている。

さらに、教員歴で詳細を分析すると、教職歴 15 年以上の教員は指導の言葉を減らす有効性を実感している一方、教職歴 7～14 年の教員は、従来の指導観との折り合いに葛藤があることが分かった。また、教職歴が 1 年程度の教員は、新たな学習スタイルを吸収しているが、学習過程の多角的な見取りや、客観的な評価の確立に課題を感じていた。

2 今後の課題

(1) 指導観の転換と指導力の向上に向けた課題

アンケートでは、多くの教員が伴走者としての指導に手応えを感じている一方で、「どのタイミングで支援するか」「子供のヘルプサインをどう見極めるか」などに課題を感じていることが分かった。また、自立した学習を支える指導法や導入手順の整理、学びの過程を見取り評価する力の向上を求める声もあり、教員主体の指導と学習者主体の学習のバランスを踏まえた指導の在り方について、組織的な検討が必要である。

(2) 教材・資料作成の負担と精選

現状では子供たちが「自立」し学習できるための資料準備に多大な時間を要しており、「どの程度の難易度や、どのぐらいの量の資料を準備すればよいか」という指導方法的な課題が残っている。また、学習指導要領に基づく確実な知識の習得と、子供の探究的な学びの時間をどう配分するかについても、引き続き試行錯誤が必要である。

本研究で得られた研究成果や課題、児童・生徒の姿、教員の気づきを、課題として片付けるのではなく、青ヶ島小中学校が「これからの学び」を創り出すための重要なプロセスとして共有し、全校体制で解決に取り組んでいく。

つなぐ

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

新島村立新島中学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

新島は東京都心から南へ約 160km に位置し、伊豆諸島の一部として富士箱根伊豆国立公園に指定されている。人口は約 2,500 人、新島と式根島の 2 島で「新島村」を構成している。

新島は、島の石材（コーガ石）で作られた「モヤイ像」が有名で、島内外に数多く設置されており、芸術と地域資源を活用した好事例である。さらに、白い砂浜とクリームソーダ色の海が続く「白ママ断崖」からは太平洋を一望できる。自然の美しさと地形の魅力を感じられるスポットである。



(羽伏浦海岸)

2 学校の概要

新島中学校は、昭和 22 年に開校した。令和 7 年度の生徒在籍数は、1 年生 13 名、2 年生 22 名、3 年生 7 名の計 42 名であった。

各学年 1 学級ずつの 3 学級に加え、特別支援学級が 1 学級、通級指導学級が 1 学級の計 5 学級となっている。

新島中学校の特色ある教育活動は、①「体力向上を目的とし、放課後に全校生徒が敷地内を走る『新中タイム』の実施」②「総合的な学習の時間に行う地域おこしプロジェクトの実施」③「学校行事の充実」が挙げられる。

生徒数が少なく、学校行事でできることに限りがあるため、中学生は学校外の行事にも積極的に参加し、地域と学校が協働して生徒の育成に取り組んでいる。



(新島中学校校舎)

II 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編」（文部科学省）では、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、

（中略）我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」と言われている。

加えて、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）【概要】（令和3年1月文部科学省）では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の教職員の姿として、「学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たしている。」ことを示している。

これらを踏まえ、本校では、主体的・対話的で深い学びを実現するために、まずは学習や生活の基盤となる力として、生徒に話を聴く態度を身に付けさせることを重視している。また、授業づくりとしては、教師は、生徒の学びを支えるファシリテーターとして、生徒の考えや意見を聴き、「分かって楽しい」と実感できる学習を目指してきた。

そこで、生徒も教師も互いが相手の話を聴き、生徒の主体的な学びへとつなげるという意味も込めて、令和6年度から「聴き合おう」というスローガンを掲げている。



このスローガンを具現化する取組を考えたところ、教師の授業力の向上が課題としてあがった。「令和の日本型教育」を踏まえると、教師は、生徒と知識及び技能、生徒と教師、生徒と生徒との関係を意図的に関連付け、互いを「つなぐ」役割を果たせるよう、教師自身が変わっていくことが必要であると考えた。

以上から、研究主題を「つなぐ ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～」とし、教師の授業改善に焦点を当てて研究を進めることにした。

2 研究のねらい（研究仮説）

研究主題に迫るために、以下の研究仮説の下、目指す生徒像の実現に向けて研究を進めた。

(1) 研究仮説

生徒と知識及び技能、生徒と教師、生徒同士などを「つなぐ」ことを意識した授業改善に取り組むことで、教師の授業力が向上し、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。

(2) 目指す生徒像

主体的・対話的で深い学びを実現することにより、育成される生徒像を次の3点とした。

目指す生徒像	学習状況
主体的に学習に取り組むことができる生徒	学習内容を自分事として捉える
自身で課題を見付け、課題解決に向け努力できる生徒	事象や資料から課題を設定し、課題解決に取り組む
他の生徒の意見を尊重し、自身の考えを再構築できる生徒	他者の意見を参考に考えを深める

Ⅲ 研究の内容

1 研究の構想図

背景

《学習指導要領》 「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編」（文部科学省） 中央教育審議会答申 『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』（令和 3 年 1 月） （中央教育審議会答申）	《学校の課題》 ○生徒の学習の基礎・基本の定着 ○生徒が自ら学び、考える授業作り ○授業改善に向けた校内研究の視点の明確化 ○授業改善サイクルの確立 ○聴き合う態度の育成	《新島村教育委員会教育目標》 基本方針 3 「個性を生かす学校教育の充実」 ○基礎・基本の徹底 ○自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力等の資質・能力の育成 ○個性を生かす教育の充実 ○国際社会に貢献できる人材の育成
---	---	---

研究主題

つなぐ ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

研究の仮説

生徒と知識及び技能、生徒と教師、生徒同士などを「つなぐ」ことを意識した授業改善に取り組むことで、教師の授業力が向上し、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。

《令和 7 年度 目指す生徒像》

○主体的に学習に取り組むことができる生徒 ○自身で課題を見付け、課題解決に向け努力できる生徒 ○他の生徒の意見を尊重し、自身の考えを再構築できる生徒

研究の内容

教師の授業力向上に向けて

(1) 「授業力分析シート」の活用 ア 授業力分析シートを活用した授業の振り返り イ 授業力を高める校内研究体制	(2) 「授業アンケート」の実施 ア 生徒を対象とした授業アンケートを年 3 回実施 イ 学びの変容の把握及び授業実践の効果検証	(3) 学習環境の充実 ア 特別支援の視点から考えた学習環境に関するチェックリストの作成 イ 共通理解と環境整備
---	---	---

2 研究の方法

(1) 授業力分析シートを活用した授業づくり

ア 授業力分析シートを活用した授業の振り返り

東京都教職員研修センターが作成した「授業力分析シート」を使用し、授業者と観察者が同じ視点を共有して授業分析ができるようにした。

具体的には、授業過程の中で「つなぐ」を意図的に位置付けた場面に星印（★）を記載し、授業のどの場面で「つなぐ」指導が具現化されているかを明確にした。

〈例〉

	学習内容・学習活動	・指導上の留意点 ○評価
導入 5 分	Greeting	・英語を話しやすい土壌を作る。
展開 15 分	・Let's Enjoy Speaking 4 ★仮定法の表現を含む Q A をペアで行う	★発表で使う表現のため、発音やイントネーションを意識させる声かけを行う。 ・仮定法の確認を自然に取り入れ安心感を与える。

授業力自己診断シート					
4 当てはまる 3 どちらかという当てはまる 2 どちらかという当てはまらない 1 当てはまらない					
番号	分類	視点(例)	診断項目	選択	平均値
1	指導技術 (授業展開)	学習の見通し、振り返り 学習課題の提示 学習意欲 発問の工夫 知識・技能の指導 資料提示 効果的な板書 主体的・対話的で深い学び	授業の始めに目標を明確に示すことで、学習の見通しをもたせている。		
13			導入場面で、児童・生徒の学習意欲を引き出し、主体的な学習を促している。		
14			思考を促し、一人一人や集団で解決していくのにふさわしい課題となっている。		
15			児童・生徒が自分で考え、解決していく授業展開をしている。		
16			一人1台学習者用端末等のICTや教材・教具を効果的に活用し、児童・生徒の理解を深めるようにしている。		
17			学習の流れが分かり、思考を広げたり深めたりする板書になっている。		
18			主体的・対話的で深い学びを通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を児童・生徒に身に付けさせている。		
19			授業のまとめで学習の目標に対応した振り返りをさせている。		
20			児童・生徒が学習に集中して取り組めるよう、環境の整備を行っている。		
21			学習指導要領の目標や内容を理解し、教材分析をしている。		
22	教材解釈、 教材開発	教材研究	専門的知識を生かすとともに、新しい教育課題等に応じた教材研究をしている。		
23		学校や地域の特徴	学校や地域の特徴を生かした教材開発をしている。		
24		児童・生徒の興味・関心	児童・生徒の興味・関心を引き出す教材開発をしている。		
25					

大研究授業Ⅰの
重点取組

大研究授業Ⅱの
重点取組

大研究授業Ⅲの
重点取組

(東京都教職員研修センター授業力向上課が作成した「授業力自己診断シート」の抜粋) ※赤枠及び赤字は、本校にて追記
引用URL: <https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.lg.jp/staff/03hissyu/index.html>

イ 授業力を高める校内研究体制

シートを活用した校内研究を進めるため、次のとおり研修体制を構築した。

①校内の教員を3グループに分けて編成、②グループ内で、ペアを設定、③グループで、大研究授業と呼ばれる校内全体の研究授業担当者1名、小研究授業と呼ばれるグループ内の研究授業担当者を決定。なお、9教科の全教員がいずれかの授業を担当するようにした。

研究の進め方は、全てのグループが、①授業者による指導案作成、②ペアによる指導案検討、③グループでの指導案検討、④授業実施、⑤ペアでのリフレクション、⑥グループでのリフレクション、という流れで実施した。

このように研究授業とリフレクションを積み重ねた後、教員は授業力分析シートを用いて自己の授業実践を振り返り、重点課題の達成状況や新たな課題を確認する。この往還を繰り返すことにより、教師が自らの授業を客観的に振り返り、「つなぐ」学習過程を設計及び実現する力を高めていく、授業改善サイクルの体制を整えた。

(2) 授業改善に向けた、生徒への「授業アンケート(学習の取組状況)」の実施

生徒の学習の取組状況や意識を把握し、授業改善に取り組むために、「授業アンケート」を実施する。

アンケートは年間3回実施し、年度当初の回答結果を基準とし、教師の授業改善と生徒の学習の取組状況や意識の変化を分析できるよう表にまとめる。その際の集計方法は、質問項目のうち、特に研究主題に関わる2項目を選択し、記述式で回答を求めることにする。

記述式での回答を取り入れる意図は、数値結果に依存しすぎることなく、生徒の考えを把握できるようにし、個に焦点をあてた授業改善につなげるためである。

2025 授業アンケート(11月実施)

年 番 名前

以下の項目について、日常の授業や家庭学習を振り返って、該当する数字を記入してください。授業改善の資料にします。

1. 自分の学習活動を振り返って 4: そう思う 3: だいたいそう思う 2: あまりそう思わない 1: そう思わない

項 目	評価
① 家で予習をして授業に臨んでいる。	
② 家でその日の授業の復習をしている。	
③ 授業中に先生や他の生徒の話をよく聞いている。	
④ 授業中に安心して自分の意見を言うことができている。	
⑤ わからないところを授業中に、他の生徒に安心して質問できている。	
⑥ 授業中、考えるべきときに、一生懸命考えている。	
⑦ 宿題や提出物に積極的に取り組んでいる。	
⑧ 自分にとってどのような学習が必要か考えて、家庭学習ノートに取り組んでいる。	

【2. ④について。自分自身の成長した点を具体的に書きなさい。】

.....

.....

.....

【2. ⑦について。あなたが2. ⑦のように感じた場面の教科名を書きなさい。また、その時の具体的な行動を書きなさい。】

教科名 ()

.....

.....

2. 中学校の授業について 4: そう思う 3: だいたいそう思う 2: あまりそう思わない 1: そう思わない 0: わからない

項 目	国語	社会	数学 北 寺	理科	英語 川 高	音楽	美術	保健	技術	家庭
① 学習規律(姿勢、話し方、聞く態度、居眠り禁止など)を適切に指導してくれる。										
② 1時間毎の授業の目標がはっきり伝えられる。										
③ 授業中、少人数で他の生徒と意見を交流する時間がたくさんある。										
④ 少人数で他の生徒と意見を交流することで授業の内容がわかるようになった。										
⑤ わからないときに質問しやすい雰囲気である。										
⑥ 授業中、考える時間がたくさんある。										
⑦ 授業中、他の生徒の考えを聞いて自分の考えが深まり、自分とは違う考えも参考になっている。										

※数学・英語のアンケートに答える際は、普段授業を受けている先生のみを回答してください。

(授業アンケート)

(3) 特別支援教育の視点を取り入れた学習環境の充実

主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、日々の授業を支える学習環境の整備が不可欠である。本校では特別支援学級と特別支援教室を設置し、教育活動全体を通して、生徒一人一人の実態に応じた特別な配慮や支援を行っている。

現状を生かし、誰もが学びやすい環境整備を校内で統一することで教師の授業力向上を図る。具体的な取組としては、①共通理解と環境整備、②チェックリストの作成である。

学習環境の整備についての目的や必要性について教職員間で共通理解を図るために、特別支援教育担当教員が学習環境に関するチェックリストを作成する。

2. チェックリスト

- ☐ 教室前面の掲示は最小限(学校目標と時計)になっているか。
- ☐ 教卓の上に物が多くなってしまう場合は、教卓の棚に入れているか。
- ☐ コード類の見える範囲が最小限になっているか。
- ☐ 窓の外の情報を遮るためにカーテンを活用しているか。
- ☐ロッカーの上に生徒の私物を置いていないか。
- ☐ロッカーの中が整理されているか。
- ☐ 本時の流れを提示し、生徒が見通しをもてるようになっているか。(ミニホワイトボードなどに書くとなお良い)

(学習環境に関するチェックリスト) ※一部抜粋

それを基に、各分掌・学年会議で重点項目を定め、学習環境の整備を行う。特に「教室前面の掲示は最小限(教育目標と研究スローガン、時計)になっているか。」という項目は最重要項目とし、校内すべての教室で生徒が学習に集中できる環境の整備を図ることにした。

3 授業実践

(1) 大研究授業Ⅰ～第3学年（7名） 社会科～

ア 単元名 「第6章 二度の世界大戦と日本」の「3節 世界恐慌と日本の中国侵略」

イ 本時の目標

昭和恐慌が日本に与えた影響について、諸資料を読み取ることを通して理解する。

世界恐慌が日本に与えた影響について、政治・経済・国民生活や世論の変化と関連付けて、多面的・多角的に考察し、表現する。

ウ 研究主題との関連について

【目指す生徒像】

主体的に学習に取り組むことができる生徒

【重点とする取組】

○児童・生徒が自分で考え、解決していく授業展開をしている

アンケートでは、「授業中、考えるべき時に一生懸命考えている」や「授業中、考える時間がたくさんある」の項目において肯定的な回答が十分ではなかった。

このことから、生徒が自ら考えながら課題解決に向かう学習過程を充実させる必要があると考えた。加えて、歴史的分野の授業においては、出来事を「過去のこと・他人事」として捉えてしまう生徒も一定数いる。そこで、本時では、「自分が当時に生きる人だったら…」という視点を取り入れ、歴史上の出来事を自分事として捉えながら考察できるよう、単元を貫く課題や発問を工夫した。

○一人1台学習者用端末などのICTや教材・教具を効果的に活用し、児童・生徒の理解を深めるようにしている

資料の読み取りやインターネットを活用した情報収集の場面を設定し、生徒が自ら考え、根拠を基に判断できるように教材教具及びICTの活用を通して学びをつなぐ工夫を行った。

エ 成果

○生徒は、「もし自分が当時の国民だったら」という視点から資料を読み取り、当時の社会状況と自身の考えを関連付けながら考察していた。

○歴史的事象を自分事として捉え、主体的に学習に取り組む姿につながった。

オ 課題

○生徒は提示された資料の内容を基に考察することはできていたが、世論が変化する過程については十分に関連付けて捉えられていない場面が見られた。複数の資料や知識を関連付けながら考察し、理解をさらに深めることができたと考える。

○生徒は提示された資料の内容を基に考察することはできていたが、世論が変化する過程については十分に関連付けて捉えられていない場面が見られた。発問や場面設定を一層工夫する必要がある。



(生徒と知識をつなぐ場面)

(2) 大研究授業Ⅱ～第2学年(21名) 英語科～

ア 単元名 NEW CROWN 2、English Series 2、Lesson 5 Visiting Australia

イ 本時の目標

単元での課題と学習方法を見直し、自分で目標を立て、必要な学習に取り組むことができる。

ウ 研究主題との関連について

【目指す生徒像】

○他の生徒の意見を尊重し、自身の考えを再構築できる生徒

【重点とする取組】

○「主体的・対話的で深い学び」を通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を児童・生徒に身に付けさせている。

アンケートでは、「少人数で他の生徒と意見を交流することで授業内容がわかるようになった」「授業中、他の生徒の考えを聞いて自分の考えが深まり、自分とは違う考えも参考にしている」の項目で「あまりそう思わない」と答えた生徒が複数いた。

また、本校の生徒は、与えられた課題には懸命に取り組むが、自分自身で目標をもち、粘り強く学習に取り組むことに課題が見られる。

そこで、生徒同士の学びをつなぎ、対話を通して思考を再構成させる学習活動を重視した。

具体的には、2年生最後の言語活動として行う寸劇を単元のゴールとして位置付け、生徒同士が考えを交流させながら学習を進めることで、基礎的・基本的な知識及び技能の習得及び思考力・判断力・表現力の涵養を目指した。

エ 成果

○生徒は友達の見解を参考にしながら自身の考えを見直し、課題解決に向けて学習を進める姿や、生徒同士の意見交流を通して、多様な考えに触れながら思考を広げたり深めたりする様子が見られた。

○生徒同士の学びをつなぐことで、対話を通して考えを再構成する学びにつながった。



(生徒と生徒をつなぐ場面)

オ 課題

○生徒同士の対話は見られたものの、他者の考えを基に自分の考えを再構成するまでには至らない場面も見られた。

○生徒によって対話への参加状況に差が見られたことから、生徒同士のつながりを生かした学びを一層充実させる必要がある。

(3) 大研究授業Ⅲ～第3学年（7名） 英語科～

ア 単元名 NEW CROWN 3 Further Reading 1 A Vulture and a Child

イ 本時の目標

発表において、グループ内での意見の対立や違いを整理して提示し、聞き手に伝わるような表現の工夫をしている。

ウ 研究主題との関連について

【目指す生徒像】

○自ら課題を見付け、課題解決に向け努力できる

【重点とする取組】

○児童・生徒の興味・関心を引き出す教材開発をしている

アンケートでは、「授業中に、『やってみたい』『学んでみたい』と感じる時がある。」という項目において全教科を通して「あまりそう思わない」が71.4%であった。

このことから、生徒が学習内容に興味や関心をもち、事象や資料から課題を設定する教材が必要であると考えた。

また、これまでの授業において、特定の人物の立場に立って意見を述べる活動で生徒の発言が活発になり、思考が深まる様子が見られたことを生かす。具体的には、本時では、ケビン・カーターという写真家の立場から考えを交流する場面を設定し、多面的・多角的に考察できるようにした。

エ 成果

○生徒は、事象や資料を根拠として自分の考えを表現し、課題解決に向けて主体的に取り組む姿が見られた。

○生徒は、賛成・反対の双方の立場から考えを交流することで、多様な見方や考え方を基に自身の考えを見直しながら課題について考察していた。

オ 課題

○生徒によって課題に対する考察の深まりに差が見られた。評価規準の共有や振り返りの工夫を通して、課題解決に向けて考える視点を明確にする必要がある。

Ⅳ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果及び課題

(1) 授業力分析シートの活用について

ア 自己評価の集計結果

「児童・生徒理解」については、全体として数値が上昇した教員の割合はそれほど高くないものの、平均値の上昇幅は最も大きかった。このことから、生徒による授業アンケートを基に授業計画を立案・改善したことが、生徒理解の深化につながったと考えられる。

分類	4月と2月で 数値が上昇した教員数	
使命感、熱意、感性	6名／14名	43%
児童・生徒理解	9名／14名	64%
統率力	9名／14名	64%
指導技術 (授業展開)	13名／14名	93%
教材解釈、教材開発	11名／14名	79%
「指導と評価の計画」の 作成・改善	12名／14名	86%

(授業分析シート結果)

また「教材解釈・教材開発」「指導技術」「『指導と評価の計画』の作成・改善」については、数値が上昇した教員の割合が高く、多くの教員が授業力の向上を実感している。

イ 自分の授業力に関するアンケート

教員自身に授業力に関するアンケートを実施した。（下記、抜粋）

教師A	生徒の興味・関心を高める発問力を向上させることができた。また、集団や生徒の特性に合わせた学習活動の展開をすることができた。
教師B	教師が話しすぎる授業ではなく、主体的で自分自身で解決していく形の授業形態にすることができた。
教師C	生徒が「学びたい」「考えたい」と思えるように、教材の工夫や発問の精選等を通して、学習内容と生徒自身の関心をより強くつなぐ授業展開を図る必要がある。
教師D	生徒の主体的な学習を促すような授業を展開できていないことを課題として考えている。次年度は、教材開発を重点として生徒の学習意欲を引き出していきたい。まだ生徒の主体的な学習を促す授業を展開できていない。

ウ 考察

イから生徒の興味・関心を高める発問の工夫や、生徒が主体的に課題解決に取り組む授業づくりなど、「つなぐ」視点が授業に反映されていることが分かる。一方で、生徒の学習意欲を引き出す教材開発や主体的な学びを促す授業展開を課題とする記述も見られた。「つなぐ」を意識した授業改善は浸透しつつあるものの、継続的な取組が必要である。

(2) 生徒の授業アンケート（学習の取組状況）の実施について

ア 数値化した生徒の学習状況を踏まえた授業づくり

授業アンケート（生徒対象）は、年間3回実施した。（下記、抜粋）

	④少人数で他の生徒と意見を交流することで授業の内容がわかるようになった。			⑦授業中、他の生徒の考えを聞いて自分の考えが深まり、自分とは違う考えも参考にしている。		
	1 学期	2 学期	3 学期	1 学期	2 学期	3 学期
最大値	3.71	3.58	3.70	3.75	3.65	3.74
中央値	3.35	3.30	3.31	3.32	3.50	3.38
平均値	3.29	3.28	3.33	3.36	3.50	3.40
最小値	2.73	2.82	3.00	2.85	3.21	3.05

イ アンケートに対する教師の反応

授業アンケートの結果から、生徒同士の対話を通じた学びや、学びへの主体性について肯定的な回答が低かった。そこで、実態を踏まえた授業計画を立てることで、「自分とは違う意見を聞くことができ、学習理解度が高まった。」「自分の解き方と違う解き方を他の人がやっていて、参考にすることができた。」といった対話の有用性に価値を感じている記述がみられるようになった。

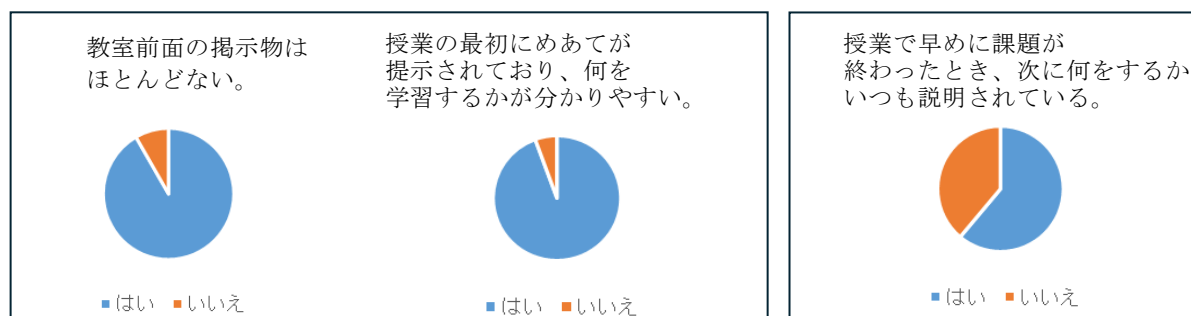
ウ 考察

④及び⑦の項目について平均値及び中央値の推移を分析することで、生徒同士の意見交流を通じた学びの定着状況を把握した。また、最小値との差から、生徒による学びの実感の違いを捉えることができた。これらの結果を基に、生徒の実態や習熟度に応じた授業づくりに役立てた。

(3) 生徒の学習環境の充実

ア 学習環境の充実のために作成したチェックリストの効果

チェックリストにおいて、特に学習と結び付きの強いと考える3項目について全生徒を対象にアンケートを実施した。



イ 考察

上の図は、9割の生徒が「はい」と回答し、教室環境の整理や学習の見通しをもたせる取組により、生徒が安心して学習に取り組める環境が整いつつあることがうかがえる。

一方、「授業で早めに課題が終わったとき、次に何をするかいつも説明される。」の項目は、「はい」が6割程度であった。教師の授業力向上の課題が浮き彫りとなった。

2 研究のまとめ

(1) 成果

教師の授業力向上のため、授業力分析シートやアンケートを活用したことは、「つなぐ」を意識した授業づくりへの意識を高めることになった。生徒のアンケートからは、学び合いが、自分の思考を深めることにつながっている実感が読み取れ、教師としても、生徒自ら学び合おうとする姿が様々な場面で見られるようになったと感じている。

(2) 課題

生徒一人一人の学習状況の把握は十分とは言えない。教師の生徒理解力を高める方法を考えることが求められる。また、学習環境の整備についても継続して共通理解を図り、さらなる改善が必要である。

生徒と知識及び技能、生徒と教師、生徒と生徒との関係を相互に「つなぐ」教師の役割を自覚し、その視点を学校全体で共有できたことを生かし、生徒の思考・対話・表現をさらにつなぎながら、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していく。

Ⅱ へき地・小規模校の教育について

青梅市教育委員会

1 青梅市の紹介

東京都の多摩西部地域に位置し、東京都の2市3町と、埼玉県の2市の合計7市町と隣接している。多摩川が市内のほぼ中央を西部から東部へ貫流し、北部には入間川の支流である霞川と成木川が流れている。東部の平地から、丘陵地、山地へと変化し、最高点は鍋割山の1,084メートルである。管内には小学校が17校、中学校が11校あり、児童数は約4,900人、生徒数は約2,600人、教職員数は約1,000人である。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 青梅市立第六中学校

丘陵地と山地の合間の盆地状の地に位置し、校舎脇に小川が流れる自然に恵まれた環境の中で、生徒は意欲的に生き生きとした生活を送っている。その中で本年度は、「進取果敢」という行動目標の下で、「21世紀型スキル」の育成・醸成を教育方針の重点とし、以下の取組を実践している。

ア 地域の「資源」を活用した「総合的な学習の時間」の取組

ホタルを軸とした自然学習をはじめ、地域の自然や歴史・文化などの独自性を生かした学習活動により、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指し、「主体的・対話的で深い学び」を実践する。防災訓練や青少年健全育成地区委員会への協力など、地域と連携し、郷土・地域に主体的に関わろうとする教育を展開している。

イ 調べる学習から考える学習へ

『六中ゼミ』では、異年齢の生徒や高校生との交流学习を通じて、生徒が自ら学習状況を把握・調整し、課題解決を図る探究学習に取り組んでいる。今年度は、考えを形成する力や態度の育成を図るため、生徒、教員ともに「ファシリテーション」について理解を深めながら推進している。



(探究学習)

(2) 青梅市立第七中学校

成木川とその支流の北小曾木川の溪流沿いに位置し、青梅市の学校で最も広い学区域をもつ。その多くは山林で市街化調整区域に指定されており、人口の流入はほとんどない。校庭にはホタルも生息するビオトープがあり、校舎は豊かな森林に囲まれている。

平成24年度からは、小規模特別認定校として市内の全地域から通学を受け入れている。この制度で入学する生徒は、全体の8割超である。生徒は異なる地域で育った経験を互いに認め合い、高め合いながら郷土成木を愛し、たくましく成長をしている。少人数の特性と地域資源を活かした体験学習など、生徒一人一人の可



(青梅学：森林学習)

可能性を最大限に伸ばす教育を展開することで生徒の心理的安定が保たれ、生徒の自己有用感が高い。地域住民は、「おらが学校」という誇りをもち、学校と協働して「森林学習」や「ホタル学習」等の「青梅学」及び、コミュニティ・スクールを活用した「茶道教室」や「絵画教室」などを充実させている。総合的な学習の時間では、探究学習を導入している。生徒が個別の課題を主体的に設定し、課題解決を図るとともに、学年の枠を超えた課題別グループ学習を通して、社会課題に対する当事者意識を高め、探究心を育んでいる。

檜原村教育委員会

1 檜原村の紹介

東京都の西端に位置し、大自然に包まれた山里である。耳を澄ませば小鳥のさえずり、小川のせせらぎが聞こえ、自然の癒しを求め、多くの人々が訪れる。春は新緑、夏は谷間や樹間を通る涼風、秋は紅葉、冬は幻想的な氷瀑など、一年を通じて自然の恵みを堪能できるのが特徴である。

村内には、小学校が1校、中学校が1校設置されており、平成23年からは檜原村立小中一貫教育校檜原学園として9年間の系統性を見据えた教育課程を編成・実施している。児童・生徒一人一人が郷土檜原で学ぶ誇りを胸に、希望に満ちた世界を創る人材（グローバル人材）となることを目指し、教育活動の推進及び充実に努めている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 檜原村立檜原小学校



(檜原小学校)

村全域が学区域であるため、バス通学者が9割以上を占めている。令和8年度の児童数は52人、教職員数は17人である。檜原学園の小学校として、小・中学校の9年間の学びの連続性を意識しながら、小学校段階からICTを活用した個に応じた指導と協働的探究学習の充実に努めている。特に、郷土教育「ふるさと檜原学習」では、林業体験や野鳥観察、村在来植物「ムラサキ」の栽培等の体験活動を重視している。そして、檜原村の郷土に根ざし、ふるさと檜原を誇りに思い、大切にする心を育成できるよう、地域・保護者との連携を深め、地域の人材及び素材を生かした教育が特色である。

(2) 檜原村立檜原中学校

村内全域を学区域とし、バス通学者が約9割、自転車通学者が約1割である。令和8年度の生徒数は28人、教職員数は25人である。檜原学園の中学校として、小学校同様に9年間の系統性や学びの連続性を意識した指導を充実させるとともに、古典芸能などの郷土の伝統・文化に触れる機会を設け、郷土への誇りを育んでいる。また、卒業後の多様な進路を見据え、特別活動と各教科等を連携させたキャリア教育の充実や、豊富な国際交流プログラムの推進を通じて、多様な他者と協働しながら一人一人が自らの人生を舵取りすることができる力の育成を目指している。



(檜原中学校)

奥多摩町教育委員会

1 奥多摩町の紹介

奥多摩町は東京都の北西端に位置し、東京都の約 10 分の 1 に当たる 225.53 平方キロメートルの広大な面積を有する。全域が秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、東京の奥庭として親しまれている。その大部分は山岳が占め、水道専用ダムとして我が国最大級の小河内貯水池（奥多摩湖）を有する。人口は約 4,300 人であり、山村の文化伝承を大切にし、人と自然が調和した潤いのある町である。



（国指定重要無形民俗文化財
ユネスコ無形文化遺産
「小河内の鹿島踊」）

奥多摩町教育委員会は、次代の町を担っていく人材の育成を目指し、「人権尊重の精神」と「社会貢献の精神」の育成を基本方針とし、子供たちの自他を大切にする心、自尊感情・自己肯定感の向上と自立心、公共心、社会貢献の精神を育成する教育の充実を推進している。学校、家庭、地域が連携し、生涯を通じて学び支え合うことのできる地域社会の実現を目指している。

2 管内の学校における教育の特色

管内には、小学校が 2 校（古里小学校・氷川小学校）、中学校が 1 校（奥多摩中学校）ある。児童数は約 120 人、生徒数は約 60 人である。

全校がコミュニティ・スクールとして、保護者・地域住民と教職員が連携を図り、地域に開かれた学校づくりに取り組んでいる。奥多摩町の自然や文化等の教育資源を積極的に活用しており、地域住民と積極的に関わりながら、各種体験学習等を充実させている。同時に児童・生徒の興味関心を高め、郷土を大切に思い、地域に貢献しようとする子供の育成を目指している。

「通いたい、通い続けたい、通わせたい学校へ」を学校教育の指導目標に掲げ、地域に愛される学校を目指しながら、小・中学校の連携した指導を大切にしている。小学校間では、日常的な交流学習や合同での移動教室、小・中学校間では、中学校教員による出前授業や中学校体験を実施している。また、小・中学校の全教職員が参加する交流会が年 3 回計画されており、授業公開や情報交換を行うなど町全体が一体となった教育活動の実践を重ねている。



（奥多摩町立古里小学校）



（奥多摩町立氷川小学校）



（奥多摩町立奥多摩中学校）

1 大島出張所の紹介

大島出張所は、伊豆諸島の北部に位置する大島・利島・新島・式根島・神津島の5島、1町3村（小学校6校・中学校6校・義務教育学校1校）を所管している。

東京都及び管内町村教育委員会の教育目標並びに各学校の教育目標の具現化を目指し、関係諸機関との連携を図りながら、管内各学校の教育環境を踏まえ、島しょの抱える教育課題を的確に把握し、各学校の教育活動の充実に必要な指導事務事業に基づき支援を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 大島町教育委員会

児童・生徒の学力の向上を図るため、大島町教育委員会は、令和6年度より大島町研究推進校を設置した。指定を受けた小中各1校が、小中連携を行いながら実践的な研究を進め、町内全校にその効果の普及を図っている。令和8年度は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」や「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の視点を踏まえ、「学び続ける児童・生徒の育成」を目指している。



(大島波浮港)

(2) 利島村教育委員会



(利島小中学校)

児童・生徒が多様な価値観に触れる機会を重視し、異なる教育環境にある学校との連携・交流を推進している。その一環として、令和7年3月に学校法人SOLAN学園（愛知県瀬戸市）と連携協定を締結し、両校の教員が、互いに学び合う組織づくりに力を入れている。児童・生徒の多様な学びの充実及び学力の向上を図るため、教員同士の意見交換や実践の共有が行われるように支援し、教育の質の向上を図っている。

(3) 新島村教育委員会

「新しい時代に必要な資質・能力の育成」を目的に、3部会の下に6分科会を構成する「新島村連携型一貫教育研究協議会」を設置し、保・小・中・高の連携による一貫教育を推進している。各校種において、児童・生徒の発達段階に応じた目指す子供の姿を設定し、異校種間の系統的教育連携及び交流を通して、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力の育成を図るとともに、児童・生徒の主体性を高め、その可能性を最大限に伸ばす教育の実現を目指している。



(新島村宮塚山から)

(4) 神津島村教育委員会



(神津小学校)

小学校と中学校の教育の円滑な接続を図るため、平成24年度より「神津島村小中連携協議会」を設置し、9年間を見通した教育の推進に取り組んでいる。令和8年度は、「神津島村授業基本モデル」の改善を図るとともに、資質・能力の育成の視点から、小中9年間を通した学びの一層の充実を推進している。

三宅出張所・三宅村教育委員会・御蔵島村教育委員会

1 三宅出張所の紹介

三宅出張所は、東京都心から南方約 180 キロメートルの伊豆諸島南部に位置し、三宅島と御蔵島の 2 島、2 村を所管している。管内には、小学校 2 校、中学校 2 校があり、児童約 110 人、生徒約 40 人が在籍している。

当出張所では、東京都教育委員会、管内各村教育委員会及び各校の教育目標の実現に向けて、教育庁指導部、教職員研修センター等と連携し、指導事務事業を展開している。なかでも、児童・生徒の情報活用能力の向上を図るため、「G I G A スクール構想」の確実な実施と『未来の東京』戦略に掲げる東京型教育モデルの実現に向け、教育庁総務部デジタル推進課や指導部義務教育指導課及び他の島しょ地域と連携して、教員の I C T 活用指導力の向上を図り、各校の教育 D X を推進している。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 三宅村教育委員会

平成 12 年の噴火による全島避難後、学校の統廃合が行われ、現在、村内は小学校、中学校ともに 1 校ずつとなっている。

三宅村立三宅小学校、三宅村立三宅中学校に三宅村立みやけ保育園、東京都立三宅高等学校を加えた「保小中高一貫教育」を推進し、各施設、校種における保育及び教育の内容を連携させる



(三宅小学校)



(三宅中学校)

ことで、園児や児童、生徒がスムーズに次の段階へ進むことができるよう努めている。

また、教育の質向上を目指し、研究の中核となる教員を育成するために、「三宅村教育研究員」を設置している。令和 7 年度は、小中共通の主題を「多様な考えを認めることのできる児童・生徒の育成～交流活動を通じて～」と設定し、2 名の教員が教育研究員として研究を行い、三宅村教育研究発表会で研究成果を報告した。

(2) 御蔵島村教育委員会

御蔵島村立御蔵島小学校、御蔵島村立御蔵島中学校の 2 校がある。これらの学校は、小中併設校でもある。島内に高等学校がないことから、児童・生徒は、中学校の卒業と同時に「15 歳の旅立ち」を迎えることが多い。

御蔵島小学校及び中学校では、異学年や異校種との合同授業や交流活動等、小中併設校の特性を生かした 9 年間の教育活動の一貫性と継続性を重視し、組織的・計画的な取組を行っている。また、動植物等、御蔵島の自然環境をテーマとした学習を進め、御蔵島の特色を理解するとともに、島の未来について考える「御蔵みらいの日」を設定している。さらに、毎月 5 の付く日には、昭和初期から続く「奉仕日」として、早朝から児童・生徒が、自主的に郷土の美化に貢献している。



(御蔵島小学校)
(御蔵島中学校)

八丈出張所・八丈町教育委員会・青ヶ島村教育委員会

1 八丈出張所、八丈町教育委員会、青ヶ島村教育委員会の紹介

八丈島は、東京都心から南方約 287 キロメートルの海上に位置し、面積 69.1 平方キロメートル、周囲 58.91 キロメートルのひょうたん形の島である。八丈町の人口は 6,565 人、世帯数は 4,066 世帯である。青ヶ島は八丈島の南方約 70 キロメートルに位置し、面積 5.96 平方キロメートルの楕円形の島である。青ヶ島村の人口は 157 人、世帯数は 113 世帯である。

管内には小学校 4 校（八丈島 3 校、青ヶ島 1 校）、中学校 4 校があり（八丈島 3 校、青ヶ島 1 校）、教職員数は 132 人、児童数は 325 人、生徒数は 140 人である。（いずれも令和 8 年 5 月 1 日現在）

八丈出張所では、学校及び教職員の抱える様々な課題に対応するために、島しょ地域研修支援事業等を活用し、喫緊の教育課題や各学校の要望に応じた研修機会の充実を図っている。

八丈町教育委員会では、八丈町の次代を担う子供たちが、地域とのつながりの中で安心、安全にのびのびと成長していけるよう教育の充実を図っている。そのために、島に息づく文化や豊かな自然、八丈方言等を取り入れた教育を推進している。また、台風を始めとする自然災害に対する備えが日常的に行われるよう関係機関、島に住む人々と連携しながら、防災教育の推進に取り組んでいる。

青ヶ島村教育委員会では、青ヶ島の豊かな自然を生かした体験活動を取り入れた教育活動を推進するとともに、持続可能な社会づくりの担い手の育成に取り組んでいる。島の伝統・文化、先人たちが築いた歴史などから子供達自身が課題を発見し、解決を繰り返すことで変化の激しい時代を自立して生きていく力と、地域社会の豊かな発展に貢献する力を育成している。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 八丈町立学校における特色

令和 7 年度のリーディング DX スクール指定を受けた三根小学校、富士中学校をはじめ、各校で ICT 機器や生成 AI を利用した授業や校務への活用が進められている。児童・生徒一人一人の学習状況に応じて、AI が助言を行う独自開発ツールについて、効果的な運用方法が検討されている。



（左：八丈小島 右：八丈富士）



（青ヶ島全景）

(2) 青ヶ島村立学校における特色

青ヶ島小中学校では、授業時数特例校制度を活用し、「青ヶ島学」を推進している。令和 7 年度は、講師を島内、島外から招き、青ヶ島の自然や文化等について授業を 10 回以上実施した。児童・生徒は、そこで得た知識・技能をもとにして、今後島がどうなっていきたいか、そのために自分たちに何ができるかを考えている。学習を通して、青ヶ島についての理解を深めると同時に、自ら学びを進める力を高めている。

小笠原出張所・小笠原村教育委員会

1 小笠原村及び小笠原出張所の紹介

小笠原諸島は、都心から南に約 1,000～1,900km の太平洋上に散在する 30 余の島々で、一度も大陸と陸続きになったことのない海洋島である。現在、人々が暮らす父島（約 2,000 人）と母島（約 400 人）には、3 校（小笠原小学校、小笠原中学校、母島小中学校）の村立学校が設置され、135 名の児童、63 名の生徒が在籍している（令和 8 年 5 月 1 日現在）。



（父島二見港）

小笠原出張所は、令和 6 年 4 月に開設され、小笠原村教育委員会及び各学校における教育目標の実現に向けて、小笠原村教育委員会、教育庁指導部及び教職員研修センター等と連携し、指導事務事業を展開している。教職員研修センターによる都教委訪問や、島しょ地域研修支援事業を活用し、年間最大 7 回の来島講師による研修の運営等を通じて、学校の課題解決、教職員の指導力向上に対する支援を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 小中一貫教育の推進

小笠原村教育委員会では、小中一貫教育の一層の充実を教育施策の中心に据えて教育活動に取り組んでいる。設置から 4 年を迎えた「小笠原村立学校小中一貫教育推進協議会」を中心として、下部組織に三委員会（授業研究推進委員会、教育 D X 推進委員会、義務教育学校在り方検討委員会）を設け、村立学校に所属する全ての教職員による小中一貫教育の推進を図っている。

こうした中、令和 7 年度から母島小中学校が義務教育学校となった。また、現在父島では小笠原小学校、小笠原中学校の施設一体型への校舎建替え事業を進めており、校舎完成に合わせた、小笠原小学校と小笠原中学校の義務教育学校化に向けて、母島小中学校での実践を基に検討を進めている。

また、各学校では、義務教育 9 年間の体系的な学びの実現を目指し、各教科等の年間指導計画を「内容のまとまり」ごとに再編し、接続を意識した教育活動を実践している。

(2) 「小笠原学習」の取組



（母島沖港）

従来から単発的な取組として行われていた地域学習を令和 4 年度、「小笠原学習」としてまとめた。小学 1 年生から中学 3 年生まで学年ごとにテーマを設け、生活科や総合的な学習の時間を中心に学習活動を展開している。

また、児童・生徒が中学校卒業時までに目指す姿を資質・能力の視点で具体的に示し、その実現に向けた取組を体系化できるよう、教育活動の充実を図っている。

さらに、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、教育活動を R P D C A サイクルに基づき実践し、成果と課題の分析をもとに教育内容や指導計画等の改善・充実を図りながら、未来の小笠原村を担う人材として必要な資質・能力の育成に取り組んでいる。

令和8年度
へき地・小規模校教育研究発表会
第29回 研究発表会資料

東京都教育委員会
東京都へき地教育研究協議会
令和8年8月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 03-5000-7064



青ヶ島村（虹とカルデラ）



新島村（鳥ヶ島）